

ドライバーのSAS検査

睡眠時無呼吸症候群の「怖さ」裏付け

要精密検査 トラック35.8% バス41.8%

ドライバーらの健康管理で運輸業界の事故防止を推進するNPO法人ヘルスケアネットワーク(OCHIS、理事長・武田祐大阪大学名誉教授、滋慶医療科学大学院大学学長)は、2015年度に実施した睡眠時無呼吸症候群(SAS)検査の判定結果と分析をこのほど公表した。これによると、要精密検査となる「D判定」、重症者となる「D+判定」が全体の37.3%に達したことがわかった。

分析は15年度にOCHISがパルスオキシメーターでSAS検査を行った1万732人の結果をデータ化したもの。男性は1万333人、女性399人。業種はトラック8794人、バス1544人、タクシー28人、その他336人。平均年齢は男性45.7歳、女性43.6歳。

判定基準で精密検査の必要性が高かったのは「D判定」3188人、「D+判定」811人だった。年代が高くなるほど精密検査の必要度が高まる傾向だが、30歳未満でも20.8%が対象となり、40代で36.8%、50代45.5%、60代46.3%と比率が高まる。特に40代以上の肥満者は各年代とも要精密検査率が5割を上回った。

しかし、「D」「D+」とも昼間に眠気や集中力が欠如して一瞬眠ってしまう自覚症状がない人ほど重症者の割合が高かった。トラックの場合、平均年齢45.3歳の8794人のうち「D判定」「D+判定」は3145人で全体の35.8%。バスは同47.0歳の1544人のうち645人で41.8%と高い比率だった。

OCHISでは今回、検査結果から対象者を医療機関に紹介し、受診、治療した状況を医療機関にアンケートした。この結果、医療機関がCPAP治療をすすめた場合に「自覚症状がない」「経済的な理由」などから拒否する人が6割を超えた。また、医療機関がどのような指導をしているかについては「CPAP治療・管理説明」「生活指導」「減量や肥満外来受診」の回答が寄せられた。

医師が患者や事業者から運転業務の可否判断を求められるケースも多く、OCHISでは「判断を医師にすべて委ねるのではなく、医師の意見を踏まえた業務内容の配慮が求められる」との意見を浴びた。

40代以上の肥満者は5割を上回る